

油屋さんの油甕

はじめに 松石源三郎商店は、東大寺転害門の北側、現在の今在家にあった油屋である。毎年、東大寺のお水取りに油を納めていたが、昭和前半期には廃業されたようである。その後も、長らく古い油屋の建物を引き継いでおられたが、改築に際して、油甕の多くは処分せざるをえなかった。しかし、その際、埋甕として並んでいた油甕のひとつを、故・松石安雄さんが引き取り、仙台のご自宅で大事に保管されていた。2014年度に、この資料を受け継いだ聡美さんから、研究資料として、ご提供いただいた。

商店の開業に関する文献史料は残っていないが、この油甕の年代からある程度の推定は可能である。備前焼の大甕で、体部内面には油の残滓らしき黒色物が残る。この油甕の分析とともに、近世から近代にかけて、東大寺のお水取りの油事情について考察を巡らせてみたい。

松石源三郎商店 過去帳によると、松石家は江戸時代に代々、「松石源三郎」の名を受け継ぐかたちで油屋を営まれていたようである¹⁾。松石源三郎の名前は、個人名でもあり、屋号でもあったのだろう。過去帳では、天明元年(1781)まで遡ることができ、奈良大学が所蔵する大和国添上郡雑司村の公文書にも、弘化3年(1846)から明治10年(1877)にかけて6ヵ所に松石源三郎の名前がでてくる²⁾。

また、松石家に残る商店の関連史料としては、明治5年(1872)と記された引き札と呼ばれる商店広告を兼ねた商業用カレンダーの画像をお借りすることができた(図75)。明治時代には、このような商業用カレンダーが盛んに作られ、宣伝とサービスを兼ねて、顧客に配られた。現代の広告用カレンダーの祖型である。

用いられた画像は、右下付近に「巨泉」との雅号が記され、大阪を中心に引き札絵師としても活躍した川崎巨泉の作によるものであることがわかる³⁾。この浮世絵風の絵は、油屋の引き札として使われたようで、同じ絵を用いた引き札(岐阜市上竹町・渡邊源二郎商店)が岐阜市歴史博物館に残されており⁴⁾、明治時代初頭の一般的な油屋の店先を描いたものと推察できる。

黒塗りに白文字で書かれたカレンダーの左側には、



図75 松石源三郎商店引き札(上)、右上部分拡大(下)

時計並二直し物仕候⁵⁾とあり、時計なども扱っていたらしい。そして大きく「本種油、石炭油」と読み、広く燃料を扱った様子がみとれる。

より興味深いのは、絵に描かれた油屋の店先に並ぶ油の種類である。右から「香油」「椿の油」「ごまの油」「梅花油」「白絞油」などの油が並ぶ。ごまの油、白絞油は食用であろう。香油、椿油、梅花油は美容・整髪用の油として販売されていたらしい。

次に、胡麻油の一種である白絞油と並んで「石油」が並ぶ点もおもしろい。「種油」は菜種油であろう。一番左は、壁掛け時計に隠れて読めないが「火口油」の名前が見える。店の右側の棚の上には、石油ランプやガンドウが並ぶ。江戸時代末から明治時代初頭には、石油ランプが家庭用にも普及した様子が見てとれる。

東大寺油倉と油倉村 松石源三郎商店があった場所は、現住所で今在家にあたるが、近世の絵図を見ると、雑司村の北端にあたる。『奈良坊目拙解』⁶⁾によると、雑司町は「往古より東大寺の領地で伽藍常住の燈明油、あるいは仏供の米穀、薪水出納、法会仏等寺院一切の雑用、その役を司った。これによって雑司村と名付けた。」また、明治7年に描かれた「大和國奈良細見圖」を見ると、商店が面する道をまっすぐ東にいくと「油倉」との文字が目につく(図77)。『奈良坊目拙解』には、油倉村について、「油倉村、東大寺領、雑司村東山上にあり、雑司枝郷である」とする。また、「当町往昔、東大寺油倉にあり、それで名にした」とある。

東大寺油倉といえば、関連史料が多く残されており、

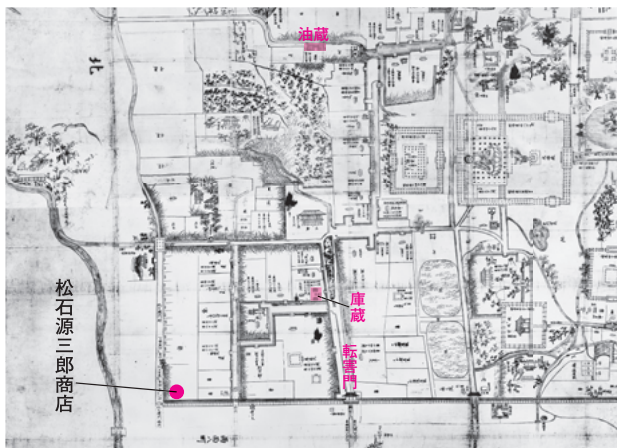


図76 寺中寺外惣絵図并山林（江戸時代初期）東大寺所蔵

東大寺の寺院経営を考える上で重要視されてきた。また、油倉とされる校倉造の建物も現存しており、建築史学においても、研究が進められてきた。既往の研究によれば、治承の南都焼き討ちの後、勧進職が油倉の運営に関わり、独自の機関として、経済活動を活発化させていくが、室町時代後期に衰退したとみられる。

しかしながら、油倉の所在地については、未解決の問題を抱えているようである。油倉は江戸時代初期に描かれた「寺中寺外惣絵図并山林」に、知足院の南東、大仏殿の北東に描かれており（図76）、これらは正徳4年（1714）に東大寺の本坊経庫などに移築され、もう一棟は、文政3年（1820）に手向山神社宝庫として移築されたとする⁷⁾。この他にも、法華堂経庫や勧進所経庫は、「寺中寺外惣絵図并山林」で正倉院の西北約150mに築地堀で囲まれた庫蔵として描かれていたものが（図76）、勧進所経庫は貞亨4年（1687）、法華堂経庫は元禄9年（1696）に、それぞれ現在の位置に移築したとされる。福山敏男は、これらも油倉であった可能性を指摘している⁸⁾が、『奈良六大寺大観 東大寺』⁹⁾ではそれを証する資料がないとする。

これら油倉と、油倉村との関係はどうであろうか。東大寺周辺は近世から近代にかけて、「油倉村」と書かれた数種類の絵図があるが、油倉村の場所は、なかなか定まらない。『大和国条里復原図』¹⁰⁾によると、油倉の小字は、東大寺大仏殿の北東方向に残る。ところが、明治7年の「大和国奈良細見圖」（図77）や「和州奈良之図」などをみると、あきらかに大仏殿の北西にも油倉ないし油倉村の名がみえる。この2ヵ所は、正倉院を挟んで東西という点においては、「寺中寺外惣絵図并山林」の油倉と庫蔵の關係に似ていなくもない（図76・77）。この点は、かつて庫蔵にあったとされる2棟も、油倉と呼ばれ、その名残が油倉村の地名として残ったとするならば、福山敏男の指摘は一考の余地がなかろうか。

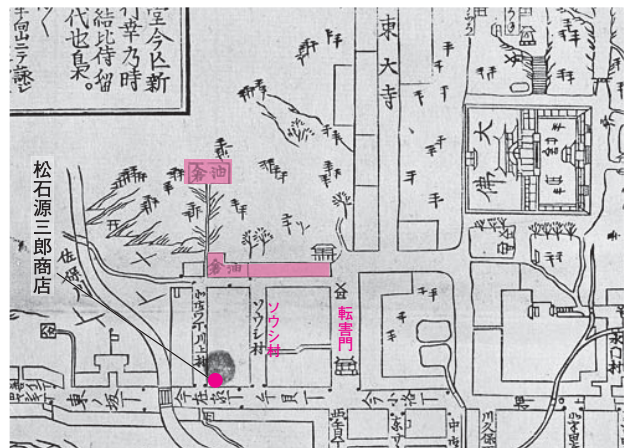


図77 大和国奈良細見圖（明治7年）奈良県立図書館所蔵

修二会と油はかりの儀式 東大寺の油倉は、文字通り、燈明に必要な油を保管する倉であったのであろう。東大寺でもっとも燈明油が重要な役割を果たすのは、お水取りの名で親しまれている修二会であろう。修二会の行事次第の前半に、油量りの作法がある¹¹⁾。

儀式では、礼堂の南仕口を開いて、堂司が南面して床机に腰掛け、処世界と堂童子がそばに立つという。堂童子の指図で、油屋が司の前の油壺に白絞油を、一斗三升、一斗一升、一斗を、それぞれ3つの壺に量り入れる。司の確認が終わると、壺に封をして、分量を記した付札をそれぞれつけて処世界に引き渡す。

現在は、煤が少ない燈明油ということで、愛知県岡崎市の太田油脂株式会社が寄進している¹²⁾が、江戸時代から明治時代までは、松石家をはじめ、まさに旧雑司村の方々が燈明油の調達を担っていたのであろう。油量りの儀式が、修二会の長い歴史のなかで、いつ頃からおこなわれていたのかは、よくわからないが、現在でも油屋の子孫として、松石家の方が参加されているのである。

油壺の年代と考古学的観察 松石源三郎商店では、倉の土間に油を蓄える大甕が地下に埋められ、馬道が通っていたという。この大甕の一つが、完全な形で残っていたのは奇跡に等しい。この資料を考古学研究から、製作年代を推定することで、商店の開業時期に関する手がかりを探ってみたい。

口縁部は4条の条線が巡る玉縁で、内面は緩やかに内湾する。肩はそれほど張らず、全体的にスリムな印象である。胴部外面は全体的に赤褐色を呈する。下半はケズリを施すが、上半はケズリは不明瞭で、板状工具によるナデが観察できる。最後に肩部に窯印と「三石入」と篋書き施す。窯印は縦横3本線を直交させたもので、先に横線3本を左から右に、次に縦線を上から下に書く。

内面にはケズリ整形の後、ハケによる器表面の調整が加えられるが、上半はケズリ、ハケ目とも明瞭でない。



図78 松石家に伝世していた備前焼油甕



図79 備前焼油甕の実測図 1:10

窯痕跡としては、胴部最大径付近で、半円形の火がきつくあつた痕跡が残り、焼成温度が高かったことがわかる。口縁部内面に降灰がかかり、正置焼成であることがわかるが、器の歪みが大きく、現状で正位に置くと安定しない。よく観察すると、底部外面には、安定させるため、何かを敷いたような溶着痕が残る。

口縁端部の玉縁の形状や条線、胴部の張りがやや小さいプロポーシオンから、帰属時期は16世紀末から17世紀前半頃までと見ていたが、備前市教育委員会の石井啓氏からのご教示¹³⁾で、慶長年間(1596~1615)の前半頃と、さらに時期を絞ることができた。商店の開業に際して、伝世の甕を用いた可能性も考えられなくはないが、江戸時代初めに商店の開業が遡る可能性もあろう。

まとめ 明治時代以降、燃料が電気やガスにかわるなかで、多くの油屋が廃業を余儀なくされたとみられる。植物油をめぐる需要や生産、流通体制も大きく変化したと考えられる。不退の行法として継続してきた修二会であるが、用いる燈明油ひとつを取っても、時代の趨勢に応じたお寺と地域の人々の努力の歴史が垣間見えたと言えよう。

なお、本研究はJSPS科研費JP15K03001「古代の灯火

—先史時代から近世にいたる灯明具に関する研究—(代表:深澤芳樹)の成果の一部である。

(神野 恵・深澤芳樹/客員研究員)

註

- 1) 現在も商店があった場所にお住いの松石家ご本家の方からご教示いただいた。
- 2) 奈良大学文学部史学科木下光生研究室「大和国添上郡難司村文書目録・解題」『奈良史学』第34号、2017。
- 3) 森田俊雄『和のおもちゃ絵・川崎巨泉—明治の浮世絵師とナニワ趣味人の世界』社会評論社、2010。
- 4) 群馬県立歴史博物館『第62回企画展図録 お店の広告—おもしろ引札大図鑑』45頁、1999。
- 5) 史料研究室の桑田訓也、歴史研究室の吉川聡より教示。
- 6) 村井古道(喜多野徳俊訳・註)『奈良坊目拙解』綜芸舎、1977。
- 7) 奈良六大寺大観刊行会『奈良六大寺大観 第9巻 東大寺』1968。
- 8) 福山敏男「東大寺の諸倉と正倉院宝庫」『日本建築史研究』墨水書房、1968。
- 9) 前掲註7。
- 10) 奈良県立橿原考古学研究所編『大和国条里復原図』、1987。
- 11) 堀池春峰ほか『東大寺お水取り 二月堂修二会の記録と研究』小学館、1985。
- 12) 寄進の経緯等については、太田油脂株式会社の鍋田光治氏からご教示いただいた。
- 13) 奈文研客員研究員西村康を通じて三次元計測の図から、ご教示いただいた。